

出版記念会講演記録

2020 年 3 月 19 日私学会館にて（加筆修正版）

『体制転換の政治経済社会学』出版の意図

－ 社会科学の総合的研究の必要性

盛田 常夫

新型コロナ禍の最中、ご参集いただきありがとうございます。多くの方々から種々の理由で参加できない旨のご連絡をいただいています。それぞれにご事情があり、ご参加いただけなかったことは残念ですが、また別の機会にお目にかかれることを期待しています。

本日は書物の内容を解説するのではなく、本書に集大成した私の研究生生活の背景を中心にお話しさせていただきます。

研究生生活に影響を与えた恩師たち

私の一橋大学大学院時代から教員生活を始めた時期に、大きな影響を受けた先生方がいます。一橋大学経済学部関恒義教授、同じく経済研究所の倉林教授、それからハンガリーの経済学者コルナイです。

1960～1970 年代の一橋大学の経済学は 3 つの潮流に分類されます。中山伊知郎先生の門下生、杉本栄一先生の門下生、そして戦後の経済研究所創設の初代所長として招聘された都留重人先生の門下生です。大学院入学当時、中山伊知郎先生は退官されており、杉本栄一先生は 1952 年に 51 歳の若さでお亡くなりになっています。このお二人の先生が戦後の一橋大経済学を支える人材を育てられました。都留先生はいわば外様で、ハーヴァード大

学から日本に戻られました。アメリカの左派経済学者スウィージーや新古典派総合を提唱したサムエルソンと一緒に大学院時代を過ごしており、スウィージーやサムエルソンの翻訳本を出版されました。私が大学院自治会理事長になった時の学長が都留先生でした。ちなみに、当時の大学院教授会の大学院自治会担当教員は、経済研究所の倉林義正先生と商学部の今井賢一先生でした。

3名の恩師



関 恒義

一橋大学の二つの潮流

中山伊知郎門下と杉本栄一門下

東大や京大に比べて、師弟関係がきわめてリベラルだった

板垣 興一	種瀬 茂	都留 重人
篠原 三代平	宮崎 義一	高須賀義博
荒 憲治郎	伊東 光晴	中村 達也
関 恒義	浅野 栄一	永井 進
倉林 義正	宮崎 犀一	
永谷 敬三	末永 隆甫	

関恒義追悼「我が師、関恒義のこと」(http://www.morita-from-hungary.com/pdf/tsuito/tsuito_01.pdf)

中山先生は近代経済学の本流を歩み、杉本先生はマルクス経済学と近代経済学の相互理解に努められた稀有な学者で、都留先生はいわばアメリカ帰りの独立系だったわけです。私の大学院時代に師事した先生は杉本門下の種瀬先生と中山門下の関先生です。都留門下の高須賀先生は私の修士課程入試の口頭試問の教官でした。永井進さんは法政大学で同僚だっただけでなく、柏市と我孫子市の市境のご近所でした。1979年に永井さんが岸本重陳さん（横浜国立大大学、1999年没）と一緒にハンガリーを訪れた折、レンタカーでベオグラードとザグレブを旅行しました。自主管理社会主義時代のユーゴスラヴィア訪問は懐かしい思い出です。

余談になりますが、中山門下の篠原三代平先生は私と同郷の高岡出身で、駅前のたばこ屋さんの息子さんです。当時の高岡高等商業学校（富山大学経済学部の前身）には福田徳三門下の大熊信行が教鞭をとっていました。大熊は小樽高商時代に小林多喜二を教えています。

社会主義圏の動揺が始まった1980年代の終わりに、篠原先生が会長を務められていた統計研究会で、竹内啓先生とともに、社会主義研究の会を開催されました。戦後の一橋大学は自由闊達な雰囲気があり、東大や京大とは異なり、イデオロギー的な束縛や権威主義と

は無縁で、杉本先生の影響があったのでしょうか、マルクス経済学と近代経済学に拘らないリベラルな雰囲気がありました。同じ中山門下の関先生の弟子で、しかも同郷だという縁で、篠原先生には懇意にさせていただきました。中山ゼミ第一期生の板垣興一先生は同じく富山県新湊市の出身です。

クリスチャンだった一橋大学の久武雅夫先生が国際基督教大学（ICU）の非常勤を務められていて、その後 ICU 学長に就任されたのに伴い、1968 年から種瀬先生が ICU で非常勤の教鞭をとっておられました。私は種瀬先生に卒論指導をお願いしました。何度か国立の一橋大学教官宿舎にお邪魔しました。その縁で、一橋大学大学院修士課程時代には種瀬先生に指導教官をお願いしました。杉本先生の直弟子として一橋大学に残られた種瀬先生は、1983 年に一橋大学学長に就任されました。しかし、その後の学長選挙のごたごたのなかで、1986 年に心筋梗塞でお亡くなりになりました。

博士課程の指導教官だった関恒義先生は助手時代に中山先生のいわば「かばん持ち」として、公労委の会議に出席されていました。他方、研究テーマとしてノイマンの数理経済理論を研究し、数学を学ぶために東大理学部弥永昌吉教授のゼミナールに参加されていました。そのゼミナールには二階堂副包や赤摂也などの数学者がおり、その縁で赤摂也の妹君と縁を結ばれました。

その後、1960 年前後より、関先生は近代経済学に見切りをつけ、マルクス経済学へ傾斜するという異端の道を歩まれました。物静かな種瀬先生とは対照的で、誰にたいしても物おじせずに私見を述べるタイプでした。1968 年に出版された『現代資本主義と経済理論』（新評論）はサムエルソン経済学批判の書で、この書に興奮したことを覚えています。関先生の経済学批判は杉本先生の内在的批判と異なり、イデオロギー的批判を目指すもので、杉本門下の末永隆甫先生（大阪市立大学）とも激しい論争が展開されました。当時、都留先生の指導のもと、門下生たちがサムエルソン『経済学』第 6 版の翻訳を行い、岩波書店から 1966 年に出版されました。ICU では原書を使って、経済学が講義されていました。

1967 年の春学期、ICU のキャンパスが封鎖されたのに伴い、夏まで私は東大駒場キャンパスに通い、新学期の講義を聞いていました。内田忠夫先生がサムエルソン『経済学』の講義を行い、玉野井芳郎先生が発刊されて間もない『マルクス経済学と近代経済学』（日本経済新聞社、1966 年）の講義をされていました。1960 年全学連運動の理論的指導者だった青木昌彦氏（ペンネーム姫岡玲治）は玉野井ゼミ出身で、その後アメリカに留学し、スタンフォード大学教授として国際的に知られる存在になりました。

当時、「スターリン主義批判」を展開していた菊池昌典氏が 1966 年に『歴史としてのスターリン時代』（盛田書店、1966 年）を出版し、駒場の講義初日に黒板に「造反有理」と大きく板書し、毛沢東の紅衛兵運動を称賛したのを覚えています。教育学の堀尾輝久先生の講義にも出席しました。

このように、1960 年代は近代経済学とマルクス経済学の激しいせめぎ合いの時代でした。その中で大学学部生活を過ごしました。

後に、日本書籍社の中学「公民」教科書の編集で堀尾先生とご一緒することになり、玉野井先生のお嬢さんには法政大学町田キャンパスでのコンピュータ授業をお願いし、一緒に教科書を制作しました。青木氏とは面識はありませんでしたが、コルナイの日本招聘などで何度か手紙をやり取りし、ブダペストで会う約束もしていましたが、2015年に帰らぬ人となりました。菊池先生からは、1988年夏にハンガリーへ赴任する前の半年間、駒場でコルナイ経済学の講義を行うことを依頼され、あわただしい春学期を過ごしたのを覚えています。人の縁とはまことに不思議なものだとしみじみ思います。

ハンガリー留学は自分で思い立ったことではなく、赴任した法政大学飯田橋キャンパスが荒れていて、国外で静かに勉強したいという気持ちが強くなったからです。一橋大学経済研究所で国民経済計算論を研究しておられた倉林先生から、ハンガリーが面白いと聞かされ、深く考えることもなくハンガリー政府国費留学生の試験を受けました。これがハンガリー留学のきっかけでした。倉林先生の助言がなければ、ハンガリーへの留学は思いもつかないことでした。倉林先生はご存命ですが、どうしても連絡がつかず、今日の会にお呼びすることができませんでした。



さらに、もう一人、私の研究上の恩師を上げるとすれば、ハンガリーの経済学者コルナイです。

コルナイは新古典派数理経済学の一般均衡論を批判し、「不均衡の経済学」を樹立しようとししました。コルナイの批判対象であった一般均衡論の泰斗アローに草稿を送り、アローがその研究の意義を認め、コルナイはスタンフォード大学で研究生生活を送る機会を得ました。アメリカの数理経済学者には、東欧ハンガリー人学者のイメージとして、天才数学者イマンの記憶があったはずです。正統派経済学を真正面から批判する書が *Anti-Equilibrium* として発刊され、日本では『反均衡の経済学』（日本経済新聞社、1975年）として翻訳出版

されました。翻訳されたのは、東大で物理学を専攻していた岩城敦子さんと夫の博司さんです。博司さんは玉野井ゼミ出身でした。お二人はすでに他界されています。丁寧な翻訳書です。岩城敦子さんが職探しの時間を稼ぐために、ハンガリー政府国費留学生としてブダペストに留学している時に、コルナイと知り合ったようです。

1973 年頃だったと思いますが、大学院生だった私は、久保庭真彰君からコルナイの書を一緒に翻訳しないかと誘われたのですが、思案しているうちに、岩城夫妻の翻訳書が出版されました。日本経済新聞社は大部の専門的な書物を良く引き受けたと思いますが、岩城夫妻によれば、青木昌彦氏と玉野井先生の後押しがあって、出版にこぎつけたということです。コルナイがスタンフォードに留学していた時期に、研究室で隣り合わせになったのが青木氏だったのです。1983 年にコルナイの翻訳書を出そうと日経出版社に打診しましたが、『反均衡』が赤字出版だったようで、快い返事がもらえませんでした。



1983 年 1 月に法政大学社会学部 35 周年記念行事として、コルナイの法政大学への招聘が実現しました。ドナルド・ドーアさんを推す社会学者たちを制してコルナイ招聘を押し切ったのを覚えています。ノーベル賞級の経済学者ということで何とか教授会の承認をもらいました。名前を聞いたこともない学者を招聘することに OK してくれた教授会の同僚たちは、町田キャンパス移転を控え、教授会の学生自治会担当窓口として奮闘している私の労に報いても良いじゃないかということで、賛同してくれたのだと思います。

1 月のコルナイ招聘では、記念講演会と二つのセミナーを法政大学で開催しました。「不足の経済学」をめぐる討論セミナーには、宇沢弘文さんに議長役をお願いしました。宇沢さんもスタンフォードでコルナイと知り合い、その関係で東大経済学部での講演会をお願いしたのですが、東大での講演会に補助金を得るのは難しいというので、法政セミナーの

議長役を務めてもらいました。京都大学での講演会の組織は青木さんをお願いしました。当時、私も 35 歳と若く、コルナイのアテンドから講演会および二つのセミナーの組織、箱根旅行などを 1 人で引き受けるほどのエネルギーがありました。

コルナイ招聘にあたって、日本評論社から論文の編訳書を出しました。日本評論社とはそれ以来の関係です。コルナイの記念講演記録は日本評論社の月刊「経済セミナー」に掲載してもらいました。また、その後に、翻訳論文集を岩波書店（現代選書）から 2 冊出版していただきました。これらの翻訳書でコルナイの社会主義経済分析が、日本の学界に知られることになり、一種のコルナイブームが起きました。

余談になりますが、この頃に日本語ワードプロセッサの試作品が日本で販売されだし、テレビほどの大きさの UNIVAC の機器が社会学部に納入され、それを独り占めにして翻訳の仕事を行ったのを覚えています。8 インチフロッピーの実容量は 600kB ほどで、当時の本体価格は 200 万円程度だったと記憶しています。この機器がなければ、短期間に翻訳書を制作することは不可能でした。



1990 年と 1991 年に、日本経済新聞社から、コルナイがノーベル経済学賞を受賞した際のコメントの準備を依頼され用意していましたが、いずれも空振りに終わりました。数理モデルが好まれる状況で、政治経済学的なアプローチは新古典派経済学の世界から敬遠されているようです。

2006 年に発刊した『コルナイ自伝』は四大日刊紙を含め、多くの書評をいただき、経済系週刊誌のベスト経済学書トップテンにランクインされました。大部の専門書としては異例の 2000 部以上の売り上げがありましたが、採算的には厳しいものでした。赤坂の小さな

イタリアンレストランで、佐藤経明先生、久保庭真彰君、日本評論社の斎藤さんとささやかな出版記念の会を持ちました。

研究室から経済社会を分析できるのか

本書での第 1 章と第 2 章では方法論的な問題を扱っています。その意図を少し説明する必要があります。

戦後の経済学は数理経済学化の一途を辿っています。それには理由があります。物理学が数学モデルで叙述できるように、経済学も数学的モデルで説明可能になれば、物理学のように科学として認められるはずだという経済学者の思いがあります。とくに戦後のアメリカではこの思いが強くなりました。しかし、これは根拠のない思い込みです。

確かに、物理学では世界の何処にしようと、実験研究室で現象を再現し、数理モデルを構築できます。それと同じように、経済学者の間には研究室で思弁的に作られた数理モデルで、経済社会の普遍的な真理を証明できるはずだという浅はかな考えがあります。それが戦後経済学の急激な数理経済学化をもたらしました。

この問題を考えるために、物理学の事例を使って、議論したいと思います。

**ワシントン、ボストン、カリフォルニアあるいは
ロンドンから世界の社会経済を鳥瞰できるか？**

**自然科学、とくに物理学のように、世界のどこに居ても、研究室から世界の
社会経済を分析して、有効な政策提言を行うことができるか？**



**戦後、数理経済学化した新古典派経済学は、物理学と同様に、大学の研
究室で世界を解明することができるという誤解に陥っている。これこそ新古
典派経済学の傲慢である。**

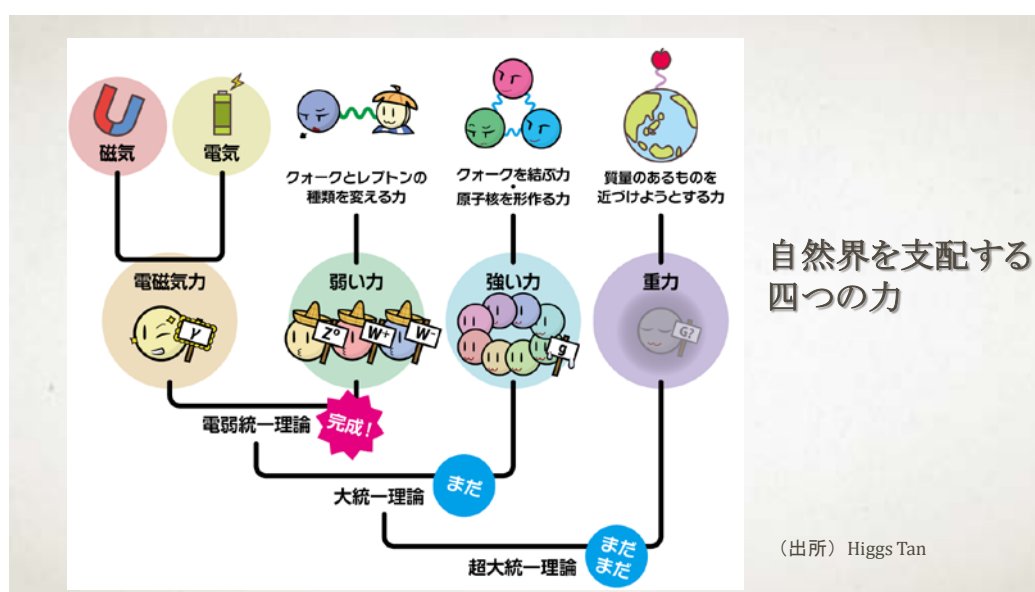
ハンガリーの物理学者クラスノホルカイ教授（デブレツェン原子研究所）は 2016 年、自然界に第 5 の力が存在する可能性があることを発表しました。それ以後、現在まで世界の研究所で、この再現実験が行われており、クラスノホルカイ教授の推測の正否をめぐって研究が続けられています。

自然界を説明する 4 つの力とは、電磁力、重力、弱い力（原子核の崩壊に作用する素粒子間に働く力）、強い力（原子核を結合する素粒子間に働く力）です。クラスノホルカイ教

授は実験から次のような推測を打ち立てました。

「励起状態にあるヘリウム原子が崩壊しながら光を発する様子を観察したところ、その粒子の分裂角度が 115 度という現在の物理学では考えられない数値であった。この現象は現在知られている 4 つの力からは説明できない。第 5 の力の存在を予測させる」

もし世界の研究所で、この事実の再現実験が行われ、同様の結論が下されれば、クラスノホルカイ仮説の正しさが証明されることになります。それはノーベル賞級の発見ということになります。



私が方法論の章で議論したかったことは、次の点です。

「経済学でも数理モデルを構築して、物理学と同じように世界の普遍的な法則を発見し、世界の経済社会を鳥瞰できるだろうか？」

正統派経済学の数理経済学者は、あたかも物理学者のように、世界発見のモデル構築に勤しんでいます。だから、現実の経済社会を渉猟することなく、研究室で思弁的に数理モデルを構築できれば、世界を理解できると考えています。

しかし、これは完全に誤った考えです。なぜなら、「自然界の研究は世界のどこに居ても可能だが、社会の研究は当該社会に内在しなければ説明は不可能である。なぜなら、社会経済の研究は当該社会の社会（人間）関係の分析を中心に据えなければならない」からです。アメリカ経済や日本経済、あるいはドイツ経済やフランス、イタリア経済、ハンガリー経済やチェコ経済あるいはバルカン経済すべてに共通する命題やモデルはあり得ません。そのような一般的な命題を定立したとしても、無内容なものです。したがって、物理学のように、数理モデルによって世界の経済社会が理解できると考えるのは自己妄想でしかありません。その意味で、新古典派数理経済学は応用数学であっても、経済社会学とは言えません。

その一つの事例を挙げておきます。これは本書での詳しく議論されている問題です。

欧米の経済学者はソ連と東欧諸国の市場経済化にあたって、速やかな「民営化」を推奨しました。IMF や EBRD のエコノミストもまた、この路線にそった民営化促進政策を提言し、その提言に沿わないハンガリーを批判するのが常でした。しかし、資本蓄積、資本市場、先端技術、経営資源・人材が存在しない旧社会主義圏で、いかにして「民営化」が達成できるのか、「民営化できるのか否か」それ自体が問題だったのです。これこそ 20 世紀末の体制転換に固有の問題（アポリア＝解決不能な問題）であり、そこから出発して体制転換を考察することが必要だったのです。そこでは旧来の経済学教科書は役に立ちません。欧米の経済学者はこのことを理解できなかったのです。

ノイマンの功罪

戦後経済学の応用数学化現象について、今少し、検討したいと思います。

経済学の数理経済学化現象に決定的な影響を与えたのは、ハンガリー人数学者ノイマン（Neumann Janos, John von Neumann）です。

20 世紀初頭のハンガリーが生んだ天才の一人ノイマンは、純粋数学から量子力学へと関心を高め、電子計算機の開発やハンガリー人物理学者とともに原爆開発に深くかかわったことで知られています。まさに八面六臂の活躍をした 20 世紀の天才の 1 人です。

ブダペストのユダヤ人銀行家の子弟として生まれたノイマンは、1919 年のハンガリー・ソヴィエト共和国樹立に伴い、資産没収に会い、ウィーンへ一時的に逃れた苦い経験があり、他方でハンガリーにおける反ユダヤ主義の台頭でハンガリーを去ることを余儀なくされたことから、生涯にわたって社会主義やナチズムに対する憎悪を抱き続けました。

数学者としては、20 世紀の巨匠ヒルベルトの助手として、ヒルベルト数学に代表される公理主義の実践の先頭に立っていました。1928 年にゲーム理論の均衡解を与えるミニマックス定理を作り、1932 年にプリンストン大学に創設された高等研究所の創立メンバー 5 名の一人として、アインシュタインとともに選出されました。まだ 30 歳に満たない研究者でした。ノイマンの関心は実に広く、ハンガリー人経済学者カルドアから経済学分野にも数学的問題があることを知らされ、この問題にも首を突っ込むことになったのです。

経済学の教科書で「限界革命」の創始者のひとりとして挙げられるオーストリアの C・メンガーの息子 K・メンガーが、この当時、数学者としてウィーン大学で教鞭をとっていました。彼が主宰する数学セミナーには、モルゲンシュテルンやハンガリー人のシュレジンガーなども加わっていました。そこにノイマンも招かれました。このセミナーの一つのテーマが、「ワルラス均衡解の存在証明」でした。ノイマンは従来の解析学手法を使った数学では問題を解決することはできず、位相数学的手法を使う必要性を説きました。その最初の解決法は 1932 年にハーヴァード大学での研究会で示されましたが、メンガーは論文の寄稿を要請し、それが Über ein ökonomisches Gleichungssystem und eine Verallgemeinerung des Brouwerschen Fixpunktsatzes. Ergebnisse eines mathematischen Kolloquiums, 8, 73–83, 1937

(English version: A Model of General Economic Equilibrium, *Review of Economic Studies* 13, pp. 1-9, 1945) として発刊されました。

この論文の中で、ノイマンはブラウアーの不動点定理を使えば、均衡存在が証明されることを示したのです。種々の不動点定理が存在しますが、ブラウアーの「不動点定理」は位相学の基本定理で、自己同形写像（同一集合間の写像）において、少なくとも 1 点の不動点が存在するというのが定理の内容です。不動点を均衡点とするように経済モデルを作れば均衡存在が証明されとうのが、ノイマンの着想だったのです。

この事例のように、数理モデルの構築では最初に結論があります。その結論をうまく導く前提条件と論理構成を編み出すことがモデル制作になります。それは現実の経済社会の分析や理解とは無関係な思考実験です。しかし、このノイマン論文が数理モデル志向の強い経済学者を直撃しました。

戦後、先端の経済学者はノイマン論文の解読に時間を費やした

1. 純粋数学での業績を諦めた数学者が経済学世界へ入り込んだ。日本では二階堂副包、宇沢弘文などが数理経済学の世界に頭を突っ込んだが、その端緒はノイマン論文だった。我が師、関恒義も東大の弥永昌吉ゼミナールに参加し、数学者とともにノイマン論文の解読を行った。
2. 二階堂副包の名著『現代経済学の数学的方法-位相数学による分析入門』（岩波書店、1960年）は9ページのノイマン論文を理解するための書物。
3. 関恒義はその後、近代経済学批判に転じ、『現代資本主義と経済理論』（新評論、1968年）を上梓し、サムエルソン経済学批判を展開。

ノイマンがこの論文を発刊した当時、経済学者で論文を理解できる者はおらず、後にモルゲンシュテルンが英訳して、多くの数理経済学者の眼にとまったのです。わが師関恒義のみならず、戦後に経済学を志し、ノイマン論文の存在を知った人々は、この論文読解のために数学を勉強し始めました。関恒義が武者修行にでかけた東大弥永ゼミでもこのテーマが扱われ、のちに二階堂副包がノイマンの着想にしたがって問題の別証明を作ること、国際的に知られることになったわけです。数学専攻者と経済学専攻者では数学レベルが違います。二階堂先生や宇沢先生など数学出身の先生方はノイマンを理解し、同種の別モデルを作ることにとそれほど苦勞しませんでした。関先生が彼らとは別の道を歩んだことは自然なことです。

さらにノイマンはモルゲンシュテルンとともに、1944 年に大著『ゲーム理論と経済行動』

を発刊しました。1994 年のノーベル経済学賞はこの著書発刊 50 年を記念したもので、3 名の研究者に与えられました。そのうちの一人がハンガリー人ハルシャーニィ（カリフォルニア大学バークレー校）です。ハルシャーニィはノイマンと同じ高校出身（Budapest Fasori Evangélikus Gimnázium）で、ノイマンの 1 年先輩には、1963 年にノーベル物理学賞したウィグナー（プリンストン大学）がいます。戦後の宗教校閉鎖によって 1952 年にこの高校は消滅しましたが、1989 年に再び校舎を再取得した教会はこの高校を再開し、建物の壁にはウィグナー、ノイマン、ハルシャーニィを称える銅板を設置しました。



さて、ゲーム理論に関してノーベル経済学賞を受賞したのは 1994 年の 3 名だけではありません。少なくとも 4~5 名はゲーム理論の業績で受賞しています。また、不動点定理を使ったノイマンの論文に刺激されて、戦後多くの数学出身者が経済学（数理経済学）の分野に参入しました。一般均衡論の数学モデルでノーベル賞を受賞したアローやデブリューなど、ノイマンが 9 頁の論文で示した種々の着想が、数学から転進した「経済学者」によって花開き、次々とノーベル賞を受賞しました。

これらの「経済学者」はノイマンに感謝してもし切れないはずです。ノイマンがいなければ数理経済学に転身することも、ノーベル賞を受賞することもできなかったはずです。ところが、現代数理経済学はノイマンのノの字にも触れることなく、戦後数理経済学の礎石はジョン・ナッシュによって築かれたと描いています。なんとしてもノイマンにまで遡ることは避けたいというのが、現代数理経済学者の共通の思いです。それは数理経済学者のコンプレックスからきています。ノイマンは 20 世紀を代表する数学者です。あらゆる分野の問題に首を突っ込み、それぞれの分野で名を残している天才です。ところが、経済学に転進した数学者は純粋数学で業績を上げられなかった数学からの脱落者で、経済学分野の応用数学で、生きる道を獲得した人々です。ナッシュの受賞を契機に、ノーベル賞のない数学から応用数学に転進してノーベル経済学賞を受賞するのは、ノーベル賞の権威を貶めるものという批判が起きたのは当然のことです。

1994 年にハルシャーニィとともにノーベル経済学賞を受賞したジョン・ナッシュは、大学院時代に書き上げた論文が 40 年以上の時間を経て受賞対象になりました。数学者として

挫折したナッシュが、大学院時代の論文でノーベル賞を受賞したことに、数学界のみならず、自然科学分野の研究者からも疑念と批判が寄せられ、ナッシュ受賞は他分野のノーベル賞審査委員多数の反対意見があるなかで決定されました。

ナッシュは数学者として成果を生めない苦悩を抱え、統合失調症を患っている学者でした。そうした特異な履歴をもつ学者がノーベル賞を受賞したサクセスストーリーが映画化（「ビューティフルマインド」）されました。映画はフィクションで実像とはまったく異なりますが、この映画のベースになった書物の書評は次のサイトをご覧ください（http://www.morita-from-hungary.com/pdf_keizai/keizai-06.pdf）。

当時、ノイマンに論文を読んでもらったナッシュは、ノイマンに「トリヴィアル」と一蹴されました。数学的に新しいものは何もなかったからです。ブラウアーの不動点定理に加え、角谷の不動点定理を使ったところが、新しいと言えば新しいのですが、いずれも既存の数学定理の応用にすぎません。

現代数理経済学者はノイマンの存在を煙たがっており、戦後の数理経済学の創始者はナッシュであるという歴史の改竄をおこなっている。

ナッシュが大学院生の時に、学位論文の制作に悩んでおり、ゲーム理論の拡張証明に、角谷の「不動点定理」を使った。当時、ノイマンに論文を見せたナッシュは、「トリヴィアル。不動点定理にすぎないじゃないか」と一蹴された。その1950年の論文が1994年にノーベル経済学賞を受賞した。

角谷静夫がプリンストン高等研究所に留学した折、ノイマンの助言を得て、ブラウアーの不動点定理の一般化をおこなった。誤解を恐れずに言えば、点対点の自己同型（写像）における不動点定理を、集合対集合の自己同型（写像）の不動点定理に一般化するものだった。これを一般均衡論に応用すれば、均衡点は1点ではなく、一定の集合になるという均衡の一般化を行うことができる。現代数理経済学者によれば、これが戦後数理経済学の出発点だというのである。

実は、サムエルソンもノイマンに一喝された経験があり、戦後に数理経済学を目指した経済学者はノイマンに畏怖の念を抱いていました。アメリカ各地で行われたノイマンの講演会は常に満員で、ハーヴァードの講演会で大学院生のサムエルソンが、「位相数学を使わなくても、解析学で解明できることがたくさんあると思うのですが」と質問した時に、ノイマンに「廊下でたばこでも吸ってきたら」（みそ汁で顔を洗ってこい）と一喝されました。

こういう経験からも、戦後の数理経済学者はノイマンを敬遠し、ノイマンの幻影を断つことに努めました。ナッシュを戦後の数理経済学の創始者とすることで、ノイマンの幻影から逃れたと考えたのでしょうか、きわめて浅はかといえようがありません。

余談になりますが、私がICU在籍3年次に、不動点定理の講義を受けたことがあります。

当時、スタンフォード大学助手だった ICU 第 2 期卒業生の雨宮健さんです。この時の講義が、私の研究を、関恒義を経由してコロナに繋げてくれたと思います。雨宮さんは、現在スタンフォード大学名誉教授です。国際的に引用される経済学論文で、日本人経済学者の第 1 位にランクされています。そのほとんどが計量経済学の論文です。ちなみに第 2 位は青木昌彦さんです。雨宮さんは日本人でノーベル経済学賞に一番近い存在です。ICU の同窓会のインタビューで、雨宮さんはお兄さんで数学者である雨宮一郎さんから、「数学者だけには絶対になるな」と諭されたエピソードを披露しています。数学で名を残せるのは天才だけというのが、数学者雨宮一郎の助言だったのです。その助言にしたがって、応用経済学者になったというわけです。

ノイマンは数理経済学の分野に貢献しましたが、しかし現実社会の分析に関心をもっていたわけではありません。現実過程の具体的事実に基づく経済社会分析こそ、経済学の土台になるものでなければならないはずです。頭で考えた抽象的なモデルから出発するのではなく、現実の具体的事実の分析から一般的に通用する命題を作なければならないはずです。そういう思考の過程を省略した理論やモデルは、現実経済の分析や政策提言に役立ちません。経済学が現実（事実）の分析に立脚するのではなく、数理モデルの構築によって世界が理解できると誤解するようになったのは、ノイマンの罪の部分です。数理経済学のほとんどが応用数学すぎないものです。応用数学から現実の経済社会が理解できることはありません。

本書の第 1 章と第 2 章の記述は、現代経済学にたいする批判にもとづいています

ノーベル経済学受賞者の経済常識

他の学問分野と異なり、経済学はきわめてイデオロギー的な色彩を有する学問分野です。ノーベル賞受賞者といえども、それから免れることはできません。数理経済学でビジネスを行うことは無理ですが（一部の例外を除き）、ノーベル賞の肩書きをバックに金儲けする人はいます。最近のアメリカの経済学者はだいたいそうです。クルーグマン（2008 年受賞者）などはアメリカから日本の経済政策を論評することでお金を稼いでいますし、ゲーム理論の応用でノーベル賞を得たマスキン（2007 年受賞者）も、ブダペスト経済大学（現コルヴィヌス大学）の創立 50 周年記念講演に招聘されましたが、大学はファーストクラスの航空券と講演謝礼で 2 万ドル以上の出費を余儀なくされました。講演内容はいたって平凡かつ無内容で、ジョンとケイトがケーキを取り合う事例を使ってゲーム理論のイロハを話すだけのつまらない 30 分程度の講演でした。

2017 年 3 月、安倍内閣は消費増税延期を目論んで、内外の著名の経済学者を集めて「リーマンショック」並みの経済危機があると喧伝しようとしていました。そのために、アメリカからわざわざスティグリッツ（2001 年受賞者）を招聘し、ご意見拝聴となったのです（経済財政諮問委員会）。

3. 債務と税のジレンマの解消

日本の政府債務には多くの人が懸念。もし金利が大きく上昇すれば、政府は問題に直面するかもしれない。
しかし、政府債務を低下させるために消費税を上げることは逆効果。

これからの3つのステップ炭素税—歳入増、環境の改善、経済活性化を同時に達成。炭素の価格を高くすることで、企業の設備投資が促進され、経済の改良が進む。
米国でさえも支持が増えている。

政府（日本銀行）が保有する政府債務を無効にする。粗政府債務は、瞬時に減少—不安はいくらか和らぐ。

債務を永久債あるいは長期債に組み換え。政府が直面する金利上昇リスクを移転。債務組み換えは、ほとんどお金がかからない。永久債の発行は、政府支出に必要な追加的歳入を調達し、経済を刺激する低コストの方法。

3. Resolving Debt-tax dilemma

Many worry about excessive Japanese debt. If there were a large increase in interest rates, government might face a problem.
But raising VAT or Consumption Taxes to reduce deficit will be counterproductive.

Three steps forward Carbon tax—raises revenue, improves the environment, and stimulates economy *all at the same time*. Higher carbon price will induce firms to make investments to retrofit the economy.
Increasing support even in US.

Cancelling government debt owned by government (BOJ). Overnight reduction in gross government debt—allaying some anxieties.

Restructuring debt towards perpetuities and long-dated paper. Shifts risk of interest rate increases away from government.
Government would pay little for this restructuring.
Issuing perpetuities: low cost way of raising additional revenues to provide necessary government expenditures and to stimulate the economy.

この招聘にどれからのお金がかかったのか知りませんが、宿泊費や同行者の費用を入れると、1000万円はかかったでしょう。まったく無駄遣いです。リオ五輪のスーパーマリオへの変身（12億円）ほどにはお金はかかっていませんが、こんな講演に1000万円を支出するのは浪費です。こうした小細工が消費税引上げのタイミングを遅らせ、コロナ禍と遭遇する運命となったのは、権力にしがみついた政治家への「天罰」でしょうか。

この時のスティグリッツの講演スライドが経済諮問委員会事務局から公表されています。その現物を見ると、丁寧な準備なしに、日本に向かう機内でやっつけ仕事のように作成したように見えます。日本政府も嘗められたものです。

「統合政府」で考えると国債残高と日銀保有国債は“相殺”される（高橋 洋一）という妄想

「統合政府」の連結のバランスシートを考えると、右側の負債をみると国債残高になる。ところが、左側の資産をみると中央銀行の保有する国債がある。

「相殺」とは、右側のグロス国債残高1000兆円から左側の日銀保有国債残高400兆円を差し引くと、国債残高は600兆円と「瞬時に減少」することを言っている。

日銀保有国債残高に対して、政府は利払いをするが、それは最終的には日銀から政府への納付金として戻ってくるので、この部分の国債残高はないものと考えてもいい。

（2017年4月6日公表）

スティグリッツのスライドの1枚に、政府債務が瞬時に消えるという文言があります。これに飛びついたのが、アベノヨイショ「学者」高橋洋一です。彼はこの文言を上のスライドのように解釈し、政府の国債が一夜にしてなくなるという「手品」を示したのです。彼によれば、「政府が発行する国債を日銀が引き受ければ、政府勘定を統合した時点で債務は帳消しになる」というのです。これにつられて同様の発言をしているエコノミストがそれなりの数でいます。政府の財政赤字など心配する必要はまったくないという議論の心強い論理として利用されています。

マクロ経済学を専攻するスティグリッツですら、経済常識がこの程度なのです。実際問題として、日銀が政府債務を帳消しにすれば、日銀は債務超過になり、日銀の国際信用は崩れ、円の暴落が生じることは明かです。これはたんなる国民経済計算上の勘定処理の問題ではなく、現実過程の問題です。スティグリッツも高橋洋一も、国民経済勘定体系と現実過程を区別できず、初歩的な間違いを犯しているのです。

もっとも、国民経済計算からみても、一般政府と日銀は同一業種の親会社一子会社の関係ではなく、また同種の経済活動を行う部門ではありませんから、経済計算体系上も二つの勘定を統合することはできません。

現代経済学はまさに「裸の王様」です。経済だけでなく、社会をもすべて理解し尽くせるという傲慢さは、「無知への無自覚」によるものです。まさに、「大いなる無知」（ソクラテス）にもとづく傲慢と言わざるを得ません。

本書の最初の2つの章で方法論の問題を扱っているのは、このような現代経済学の手法を批判するからです。

体制転換分析は経済学の独占分野であってはならない

体制転換分析のあり方

1. 20世紀の社会転換は社会科学が総動員して分析解明すべき課題。経済学者の分析には絶対的な限界がある。
2. 経済学者がワシントンやニューヨーク、あるいはロンドンから世界を鳥瞰でき、改革の指針を与えることができるというのは傲慢以外の何物でもない。
3. 経済史家、歴史家、社会学者が、体制転換分析にかかわるべき。
4. 正統派経済学は社会変動を分析することはできない。社会哲学的分析が不可欠。

社会体制の転換という大きな社会変動の理解には、社会科学を総動員することが必要です。経済学が独占できるような社会現象ではありません。しかし、経済学以外の分野での体制転換分析はそれほど活発であるとは言えません。他方、経済学分野の体制転換理解はきわめて定型化された陳腐な分析か、意味のない数理モデルによるものが大半です。そこから得られる知見はきわめて限られています。体制転換分析には社会科学が相互に協力する研究体制が必要です。

いわゆる「移行経済学」の大半は新古典派的な経済学の「常識」にとらわれた分析です。たとえば、体制転換過程の腐敗現象は、rent-seeking という市場均衡と比較した余剰部分の取得（汚職）で捉えられると考えます。まず市場均衡があり、種々の独占状態から生じる余剰の取得をめぐる汚職が、体制転換の腐敗現象だということです。市場均衡から乖離する状況がいくつかにまとめられて、腐敗現象はその分類されたカテゴリーによって説明されるというのが、新古典派的な腐敗現象の理解です。

私はこのような理解を批判しています。市場均衡から外れる典型事例をベースに腐敗現象を説明するのは、自らが設定した観念的なカテゴリーの事例（example）として、現実の腐敗現象を分析するという本末転倒の理解に陥っているからです。私は、体制転換の二つの過程（初期の混乱過程とそれ以後の安定化過程）に分けて、腐敗現象を具体的に分析しています。そこでは一切 rent-seeking 論を使っていません。社会的変動過程における具体的な事実から、実際に何が起きているかを直視し、そこから一般化できる命題を得るといったのが社会分析に基本的方法だと考えるからです。それぞれの現実過程には固有の腐敗現象が存在するのです。この点で、移行経済学は観念的に作り上げられたカテゴリーから、現実を整理するという本末転倒の分析に陥っています。現場に足を踏み入れず、研究室で考えた思考の産物にすぎず、社会分析ではありません。



本書は過去 30 年間の私の研究を集大成するものです。

1990 年に発刊した『ハンガリー改革史』は実体験にもとづく体制転換の真ただ中の分析書です。「経済評論」誌に連載した論文をまとめたもので、現実のプロセスをそのまま報告しています。

1994 年に『体制転換の経済学』は体制転換の過渡的な混乱期を抜け出しつつある諸国を統一的な枠組みの中で理解しようとしたものです。理論的な考察と現実過程の統計的資料を組み合わせ、体制転換の行く末を考えた書物です。

2010 年発刊の『ポスト社会主義の政治経済学』は体制転換から 20 年を経過した時点での、私なりの総括書です。2008 年に出版したハンガリー語版の日本語版的なもので、ややラフな叙述になっていますが、ポスト社会主義社会をどう捉えるかという枠組みを示しています。「日本経済新聞」（2010 年 3 月 21 日）にこの本の書評が掲載されました。

体制転換分析書としては 4 冊目になる本書は、これまでの研究の集大成として構想したものです。事実分析にもとづく理論的分析を心がけました。2010 年の著書では断片的に叙述したものを、事実にもとづいて詳細に分析することに努め、具体的な資料によって私の命題の一般化を支持するよう努めました。

とくに力を入れたのが、前著で簡単にしか触れられなかった「ハンガリー動乱」の叙述と分析です。この第 8 章だけでも 1 冊の新書本ができるボリュームがあります。東欧社会主義の成立過程の考察なしに、20 世紀社会主義の崩壊の分析は終わらないという信念のもとに書き上げました。この章で取り上げた問題について、別途、「ハンガリー動乱」を考える講演会を予定しています。

本書で取り上げた主要な問題は以下の通りです。

1. 経済分析の手法はどうあるべきか。数理モデルか、事実分析を出発点にすべきか。
2. 社会が崩壊する、自壊することをどのように理解すれば良いのだろうか。
3. 新たな社会体制の構築は、連続的それとも断絶を伴うプロセスなのか。
4. 国営企業を民営化すれば、資本主義企業が創出されるのか。
5. バルセロヴィッツ＝サックスの急進政策は、急進的民営化政策だったのか。
6. クーポン民営化は急進的な民営化政策だったのか。
7. 体制転換によって、資本主義経済が創出されたのか？－国庫経済の呪縛
8. 多国籍企業は国民経済に何をもたらしたのだろうか？－二重経済構造
9. ポスト社会主義の社会はどのように変わったのか、何が変わっていないのか。
10. ポスト社会主義で民族主義やポピュリズムが蔓延するのはどうしてだろうか。
11. 東欧社会主義はどのように成立したのだろうか。
12. 20 世紀社会主義とはいったい何だったのだろうか。

それぞれの問題について、本書で明確な回答を用意していますが、ここでは詳述しません。学会において、その議論を展開したいと考えています。本日は本書執筆に至る研究の歴史を中心にお話ししました。また機会があれば、本書の内容に即した講演会を企画したいと思います。

本日はご参集いただき、ありがとうございます。感謝いたします。